

## シモーヌ・ヴェイユの社会的抑圧論〔2〕

八 木 正

- 1 ヴェイユの思想の特質
- 2 社会的抑圧論の構造と展開
  - 〔1〕初期革命論集から（以上12号）
  - 〔2〕『抑圧と自由』
  - 〔3〕『労働の条件』（以上本号）
  - 〔4〕ある転機——スペイン内乱
  - 〔5〕『「イーリアス」力の詩篇』ほか
  - 〔6〕宗教的省察から
  - 〔7〕『根をおろすこと』
- 3 社会学的意義

### 〔2〕『抑圧と自由』

1955年に出版された本書（Collection Espoir, Gallimard）には、本稿の主題を成す社会的抑圧をめぐる諸論文が、一定の観点に沿って体系的に収録されている。だが、ここでは筆者の分析枠組に従って主題別に文章を整序し、ヴェイユの論理展開を再構成する方法をとってみたい。（従って、必ずしも年代順に論文を追っていない。）

さて、「抑圧」とは、一体どういう事態を指すのであろうか<sup>(1)</sup>。ヴェイユは、抑圧と従属とは相異なる別の概念であるとみて明確に区別した上で、抑圧について次のような定義を下している。

「われわれが革命に要望したいのは、社会的抑圧の廃止である。しかし、この観念がせめて何らかの意義を持ち得るためには、抑圧（oppression）と、社会的秩序への個人的恣意の服従（subordination des caprices individuels à un ordre social）とを区別するという配慮を持たなければならない。およそ社会が存在するかぎり、社会は個々人の生活を、きわめて狭い限界のなかにとじこめ、かれらに社会の規則を強制するだろう。しかし、この不可避的な強制は、強制を行使する人々と、強制を受ける人々とのあいだに分離を生じさせるという事実から、後者をして前者の意のままたらしめ、こうして実行する人々に対する支配する人々の圧迫を、肉体的・精神的な破壊となるまで重くのしかからせる限りにお

いてのみ、抑圧と名づけるに値するのである。(cette contrainte inévitable ne mérite d'être nommée oppression que dans la mesure où, du fait qu'elle provoque une séparation entre ceux qui l'exercent et ceux qui la subissent, elle met les seconds à la discrétion des premiers et fait ainsi peser jusqu'à l'écrasement physique et moral la pression de ceux qui commandent sur ceux qui exécutent.)」(「自由と社会的抑圧と  
の原因についての考察」(1934), 抑自 73 ページ, OL p. 79)

ところが、このように従属と抑圧とが明確に区別されているにもかかわらず、実際の論述においては、彼女は必ずしも厳密にこの区分にのっとり理論を展開しているようには見えない。現実の社会においては、個人の社会への不可避的従属と特権階級による抑圧とが重なり合い、一体となって抑圧的な社会状況を構成するところから、理論的にはどうあれ、実際には両者をはっきり区別することは甚だ困難である。そのためでもあろうか、ヴェイユは、厳密な意味の抑圧について語る以上に強い否定的言辞でもって、機械力にも似た社会の強制力もしくは破壊力について執ように論及している。例えば、次のような重要な指摘がなされている。

「さらに他の隷従の因子 (un autre facteur de servitude) が存在している。それは、各人にとって他人が存在することである。それどころか、よく考察するならば、これこそ本質的に言って隷従の唯一の因子なのである。人間のみが人間を隷従させ得るのだ。」(「自由と社会的抑圧……」、抑自 120 ページ, OL p. 127)

「実際には、あらゆる抑圧的社会において、いかなる人間も、どんな地位にあらうとも、単にかれの上下に位する人々に依存するだけでなく、却って何よりもまず、集団生活の作用そのものに依存するのである。それは、それだけで社会的階級 [位階] を規定するところの、盲目的作用である。(En réalité, dans toutes les sociétés oppressives, un homme quelconque, à quelque rang qu'il se trouve, depend non seulement de ceux qui sont placés au-dessus ou au-dessous de lui, mais avant tout du jeu même de la vie collective, jeu aveugle qui détermine seul les hiérarchies sociale.) ……もしも世界に、絶対に抽象的な、絶対に神秘的な、感覚と思惟との近づき得ない何物かが存在するとすれば、それは集団 (collectivité) である。集団の成員たる個人は、どんな術策によっても、これに到達したり把握したりすることも、どんな槓杆によっても、これを抑えつかけたりすることもできないらしい。個人は集団に対しては、無限小の等級に属するようなものである。(il se sent vis-à-vis d'elle de ordre de l'infiniment petit.)」(同上, 抑自 121—22 ページ, OL pp. 128—29)

「数世紀にわたっての進化のあげく、近代文明が今日採るにいたった形態以上に、この理想に反したものを考えることは不可能である。いまだかつて、個人が盲目的な集団に、これほど完全に委ねられたことはない。また、いまだかつて、人間が、行動を思想に服従

させる能力ばかりでなく、思惟する能力までも、これ以上失ったことはない。(Jamais l'individu n'a été aussi complètement livré a une collectivité aveugle, et jamais les hommes n'ont été plus incapables non seulement de soumettre leurs actions à leurs pensées, mais même de penser.) 抑圧者と被抑圧者という用語、階級の観念、そのすべてが今やまったく意義を失おうとしているほど、社会という機械を前にしたあらゆる人間の無力と苦悩とは歴然たるものがある。社会は心情を破壊する機械、精神を粉碎する機械、無意識・暗愚・腐敗・無気力・特に眩暈<sup>げんうん</sup>を製造する機械となり了った。(Les termes d'opresseurs et d'opprimés, la notion de classes, tout cela est bien près de perdre toute signification, tant sont évidentes l'impuissance et l'angoisse de tous les hommes devant la machine sociale, devenue une machine à briser les cœurs, à écraser les esprits, une machine à fabriquer de l'inconscience, de la sottise, de la corruption, de la veulerie, et surtout du vertige.)」(同上、抑自 134—35 ページ、OL p. 142)

「社会生活について言えば、それは多くの因子に依存しており、その因子はひとつひとつが理解しがたく晦渋であり、たがいに解きがたく関係し合っていて、誰だってそのメカニズムを理解しようなどとは考えさせないほどである。こうして、最も本質的に個人とむすびついた社会的職能、調整・指導・決定の職能は、個人の能力を凌駕して、ある程度集团的となり、いわば無名のものとなる。

現代生活のなかにある体系的なものが、思惟の支配をのがれる限りにおいて、規則性は、もしも集団が思惟するとすれば集团的思惟と言ったようなものに等しい事物によって設定される。」(同上、抑自 136—37 ページ、OL pp. 144—45)

この妖怪にも似た社会が個人をくわえこみ、押さえつけ、粉碎する力に較べるなら、特定の支配者が服従者を抑圧している状況は、まだしもくみしやすしい事態とすら考えられているかのようである<sup>(2)</sup>。しかしながら、ヴェイユにあっては、後者の(狭義の)抑圧は前者の隷従(広義の抑圧)と分かちがたく絡み合っていることが理解されなくてはならない。何となれば、ちょうど問題を真裏側からみることになるが、ふつう革命といえば被支配者による支配者の排除、既存の支配的秩序の転覆と考えられるのに対し、後述のように彼女は絶対にこの見解をとらず、かえって実現不可能とみえる個人の社会に対する隷従関係をあえて転倒せしめること、換言すれば人間の主体性の回復の中にこそ、真の革命の意義を見出しているからである。

「社会的メカニズムは、その盲目的な作用によって、1914年8月以後のすべての出来事が示しているように、個人の物質的・精神的な安楽のすべての条件、知的発達および文化のすべての条件を破壊しつつある。このメカニズムを支配することは、われわれにとって生死の問題である。そして、これを支配すること、それはこれを人間精神に、すなわち個

人に服従させることである。社会の個人への従属、これが真の民主主義の定義であり、また、社会主義の定義である。」「(展望、われわれはプロレタリア革命にむかっていくのか?)」(1933), 抑自 27 ページ, OL pp. 33—34)

「革命とは、思惟する主体に、物質に対しておこなう支配という職能を返すことによって、主体性が物質に対して持つべき関係を回復すること以外には意味がないのだ。」「(レーニンの著書『唯物論と経験批判論』について)」(1933), 抑自 46—47 ページ, OL p.50)

とはいえ、狭義の抑圧のメカニズムに関するヴェイユの分析も、「社会と個人」をめぐる社会的メカニズム論に劣らず、鋭く、かつ予見的である。前掲のような抑圧の定義を踏まえて、彼女は抑圧の第一条件が特権の存在にあることを明らかにするとともに、後期に透徹した仕方でも展開される、抑圧こそが力の本質にはかならない、という見方をすでにここで明瞭に打ち出している。

「力 (force) の観念は簡単なものではない。しかもそれは、社会問題を提起するためには、解明すべき第一の観念である。力と抑圧、それは二つのものである。しかし、何よりもまず理解しなければならないことは、その力が抑圧的であるかないかを決定するのは、人が何らかの力を使用するその仕方ではなくて、力の本質そのものだ、ということである。……抑圧はもっぱら客観的諸条件から生ずる。そのうちの第一の条件は、特権の存在 (l'existence de privilèges) である。」「(自由と社会的抑圧……)」、抑自 82 ページ, OL pp. 88—89)

客観的な特権の存在は、当然のことながら、われわれを社会階級の問題に導いて行く。ヴェイユは、階級を一体どのように把握していたであろうか。後ほどまた検討するように、ヴェイユの階級論はそれほど体系的であったとは言えないけれども、それにもかかわらず、マルクスの階級論と一見似ていながら、実質をまったく異にする独自の理論形成の萌芽は十分に読みとることができる。

「これまで、なんらの〔階級〕分化もまだ生じなかった、まったく原始的な社会を除いては、歴史上では階級に分裂した社会しか知られていない。生産が少しでも発達するやいなや、社会は、たがいに対立し、ことなつた利害をもつところの、さまざまなカテゴリーに分裂する。最もいちじるしい対立は、非生産者と生産者、換言すれば搾取者と被搾取者とのあいだに存在する対立である。と言うのは、非生産者は必然的に他人の生産するものを消費し、したがって他人を搾取するからである。搾取のメカニズムは各時代の社会構造を規定する。それに、唯物論的理論が搾取者を単なる寄生者と見なすことは決してできないことは、言うまでもない。階級に分裂したあらゆる社会において、他人の労働の搾取は、その社会における生産のメカニズムによって可能且つ必要とされた社会的機能を構成する。そして、こういう機能を排除する生産形態を獲得しないかぎり、階級のない社会は実現され得ないだろう。」「(断片) (1933—38), 抑自 158—59 ページ, OL p. 168)

この引用文の最後のくだりは、マルクスよりは、むしろシュンペーター (Joseph A. Schumpeter) の「機能的階級論」(筆者の命名による)をほうふつさせるものがある、とだけここでは指摘しておこう<sup>(3)</sup>。同様のとらえ方、すなわち、ある社会の支配的な社会的(必要)機能が当該階級支配体制の存立を可能ならしめるという論理は、別の箇所でもっとはっきりと述べられている。

「他の階級に対する一階級の支配体制はすべて、歴史上において、要するに、支配的な社会的職能と、一つ、あるいはいくつかの従属的職能とのあいだの区別に応ずるものである。(Toute régime de domination d'une classe sur une autre répond en somme, dans l'histoire, à la distinction entre une fonction sociale dominante et une ou plusieurs fonctions subordonnées.)」(「展望」(1933), 抑自 21 ページ, OL p.27)

参考までに、こういう機能主義的な階級の把握に対しては、マルクスが真向から否認している事実を注意をうながしておきたい。

マルクスは、この種の見解に対して、『資本論』の中で、次のような反論を試みている。

「資本家の指導は、社会的労働過程の本性から生じて資本家に属する特殊の機能であるばかりでなく、それは同時に、社会的労働過程の搾取の機能であり、したがってまた、搾取者とその搾取原料〔労働者〕との間の不可避的敵対によって必要とされている。」

「資本家は彼が産業的指導者であるが故に資本家であるのではなく、彼が資本家であるが故に産業的司令官となるのである。産業における司令が資本家の附物となるのは、あたかも、封建時代に戦争および裁判における司令が土地所有の附物であったのと同じことである。」(K. マルクス『資本論』第一部第四篇第十一章, 青木文庫版(3) 556—57 ページ)

しかしながら、問題は、マルクスの反論がいかにか説得的であるとはいえ、単なる論理上の因果関係にあるのではない。ヴェイユに即して言えば、問うべきは、特定の時代の社会状況が何を支配的な「社会的必要機能」として押し出すか、そしてその社会のどんなメカニズムによって特定の種類の社会層が支配階級として押し上げられるか、ということである。その辺の階級形成のメカニズムに関しては、彼女は寄与するに足る何ものもほとんど残していない。とはいうものの、時代によって支配的な社会機能が異るとみる観点から、支配階級が、歴史上、その特有の社会的機能に応じて異った形態をとって存在してきたことについては具体的かつ直截に説いている。それは三つの主要な歴史的抑圧形態という形で定式化されており、階級論にとって注意深く検討するに値する重要な命題を成しているように思われる。

「人類はこれまでに抑圧の二つの主要な形態を知った、と約言することができる。一つは、武力の名において行使される奴隷制または農奴制であり、もう一つは、資本に変形された富の名において行使されるものである。問題は、現在この二つのもののあとに、あたらしい種類の抑圧、機能〔職能〕の名において行使される抑圧が来つつあるのではないか

を知ることにある。(On peut dire en abrégé que l'humanité a connu jusqu'ici deux formes principales d'oppression, l'une, esclavage ou servage, exercée au nom de la force armée, l'autre au nom de la richesse transformée ainsi en capital ; il s'agit de savoir s'il n'est pas eu ce moment en train de leur succéder une oppression d'une espèce nouvelle, l'oppression exercée au nom de la fonction.)」(「展望」, 抑自 15 ページ, OL p. 21)

到来する新しい抑圧形態についても、ヴェイユはその必然性とメカニズムを的確に解き明かしている。それは、「専門化」という現代社会の基本的趨勢の中から出てくる支配のメカニズムと言うことができる。

「ほとんどすべての領域において、制約された能力の限界内にとじこめられた個人は、彼を凌駕する全体のなかに捕えられており、自分の全活動をその全体に合わせて規制しなければならず、しかも、その全体の働きを理解することができない。こういう状態のなかで、根元的な重要性を持つ職能、すなわち単に調整するというだけの職能 (une fonction qui prend une importance primordiale, à savoir celle qui consiste simplement à coordonner) がある。人はこれを管理的あるいは官僚的職能 (fonction administrative ou bureaucratique) と名づけることができる。官僚主義 (bureaucratie) が人間活動のほとんどあらゆる部門に侵入したその迅速さは、ちょっと考えただけでも驚くべきものがある。生命のないメカニズムの利益のために、人間が創意・知性・知識・方法の一切を奪われている合理化された工場は、現在の社会の彫像のようなものである。なぜなら、官僚機構 (la machine bureaucratique) というものは、人肉——しかも栄養のよい人肉で形成されているものの、それでもやはり、鉄や鋼の機械と同様に、無責任であり、無自覚であるからである。現代社会の進化全体が、官僚的抑圧 (oppression bureaucratique) の雑多な形態を発達させ、これに本来の資本主義に対する一種の自治を与えるという傾向を持っている。」(同上, 抑自 19—20 ページ, OL pp.25—26)

企業組織の中では、それは労働力の買手と売手との間の対立とは別の、もう一つの対立、「生産手段そのものによって、機械を左右する者らと、機械に左右される者らとのあいだに、作られた対立 (une autre opposition, créée par le moyen même de la production, entre ceux qui disposent de la machine et ceux dont la machine dispose) (同上, 抑自 16 ページ, OL p.22) となって現われる。「こうして、企業の周囲には、まったく別箇の三つの社会層が存在する——企業の受動的な道具である労働者、崩壊しつつある経済制度に支配の基礎を持っている資本家、そして、これに反して、その発展によって自分の権力をますます増大させる一方であるところの、技術に依拠している管理者。」(同上, 抑自 18 ページ, OL p.24)

この新しい支配階級が、現在〈テクノクラート〉と称されている社会層であることは、

改めて断るまでもない。これに関しては、「テクノクラシー、ナチ主義、ソ連、その他についての考察」という小論文が参照されなくてはならない。そこでは、三種の官僚主義——組合官僚主義、産業官僚主義、国家官僚主義——が単一の機関に融合し、新しい官僚主義の権力を生んでいることが指摘されている。「官僚は、<sup>カースト</sup>閥であるにせよ階級であるにせよ、社会的闘争における新しい因子である。」(抑自 37 ページ, OL p.42)

ヴェイユのこのような分析視角からすれば、結局、「抑圧的社会的の成員は、かれらが社会機構につながっている高い、あるいは低い場所によって区別されるだけではなく、さらにまた、社会機構に対する彼らの関係の、意識的な、あるいは受動的な性格によっても区別される (Ainsi les membres d'une société oppressive ne se distinguent pas seulement d'après le lieu plus élevé ou plus bas ou ils se trouvent accrochés au mécanisme social, mais aussi par le caractère plus conscient ou plus passif de leurs rapports avec lui.)」(「自由と社会的抑圧……」, 抑自 128 ページ, OL p.135) と帰結されるのは、けだし当然のことである。しかも、「この第二の区別は、第一のものよりも重要であるが、第一のとは直接のつながりはない」とされている。してみると、これは単なる上下的な階級的体統ではなく、それとは別次元に走る社会の亀裂であると言わなくてはならぬ。

われわれはここで今一度さきにもた社会の盲目的必然性のメカニズムの問題にたちかえてみる必要がある。だが今や、人みなが不可抗的に社会機構に引きこまれるその一般の様相ではなく、個人が占める社会的地位——上位・下位というより、能動的・受動的な軸によって分けされた位置ないし層——のいかんによって、その組みこまれかたに質的差異があることに着目しないわけにはいかない。ヴェイユが強調してやまないように、社会の全構成員に及ぶ前者のくびきの方がより重苦しいにはちがいないが、だからといって、抑圧的社会的の成員をただ並列的に取り扱うことは許されないはずである。何となれば、技術文明が進展するにつれて、工場の機械に対してだけではなく、社会という機械に対しても、機械の操作に関して能動的な職責に在る者と受動的な位置に甘んじている者との間に超えがたい溝と対立とが介在し、そして受動的人間の層に対しては、社会的隷従のしくみと抑圧のくびきとが相まって、より重圧的な桎梏となって働くであろうことは、否定しえぬ事実だからである。

こうしてみると、社会の文明化に伴って社会的抑圧から解放されるという命題には、何の根拠も妥当性も見出すことはできない。まったく逆に、時代を追うてむしろ社会的抑圧が加重されてくるのではないかとさえ思われてくる。

「現代にいたるまでの人類の発達全体を概観するならば、また特に、ほとんど不平等なしに組織された原始的部族を、われわれの現在の文明と対立させるならば、まるで神秘的な平衡の作用によるかのように、社会的抑圧の羈絆 (le joug de l'oppression social) をそれだけ重くすることなしには、自然的必然性の羈絆を軽くすることに、人間は到達し得な

いかに見える。そして、さらにいっそう奇妙なことには、人間集団は、自然の法外な力が弱い人類を苦しめているところの重みから、かなりな程度において解放されたとしても、その代り、同様な方法で個人を粉碎する点では、自然をいわば継承したかの如くである。」(「自然と社会的抑圧……」, 抑自 100 ページ, OL p.107)

人間は自然力の法則を駆使することによって「自然の支配者」になるとされている。ところが、「この集団的支配は、人が個人の段階におりるや否や、奇妙な転倒によって隷従に転化する。」「近代労働者の努力は、飢餓が原始的狩猟者をしめつけるのと同様に、残酷な、同時に無慈悲な、そして同等に強くしめつけるところの束縛によって強制されている。この原始的狩猟者から、鞭でたたいて働かされたエジプトの労働者、古代の奴隷、領主の剣でたえず脅かされていた中世の農奴を経て、現代の大工場の労働者にいたるまで、人間は、外部の力によって、ほとんど即刻の死の恐怖のもとで労働させることを、決してやめたことがない。そして、労働の動作のつながりについて言えば、これまた、原始人に対してと全く同様に、現代の労働者に対しても、しばしば外部から強制され、前者に対しても後者に対しても、同様に不可解である。それどころか、この領域においては、強制はある場合には、今日では以前よりも比較を絶してはるかに残酷である。古代人はどんなに慣例と盲目的な模索とに没入したとしても、かれは少なくとも自己の危険において反省し考案し革新することを試みることができた。これは、流れ作業の労働者からは絶対に奪われている自由である。」(同上, 抑自 101 ページ, OL p.108)

社会的抑圧について掘り下げて分析するには、次いで、権力をめぐる人間の葛藤とそのメカニズムを究明することが不可欠である。魔性を秘めた権力が人間を幻惑し、そうすることにより人間社会にある構造と変動をもたらして行く様相は、社会学的研究テーマの中でも、おそらくは最重要の部類に属するであろう。であればこそ、既存の著名な社会学者が例外なくこの困難な重大問題に挑戦を繰り返してきたのであるが、それにもかかわらず、その実相は十分に解明されたとは言いがたい。権力と支配、権力と階級、権力の変形などの問題については、M.Weber, G.Simmel, V.Pareto, G.Tarde, R.M.MacIver, 高田保馬らの諸学説が吟味さるべきであろう。しかし権力(追求)の本性そのものについては、他の誰よりも、ヴェイユの分析は深く本質をえぐっている。

社会構造の中核を成す階級を規定する際に、その客観的条件として「特権」を挙げたヴェイユは、権力のメカニズムの究明に当たっては、権力そのものよりも、人間が飽くなき権力の追求に巻きこまれて行く様相の方に、特に注意を向けている。その根拠は、次の点にある。「特権それ自体では、抑圧を規定するには足りない。不平等は、弱者の抵抗と強者の正義感とによって、容易に緩和されるだろう。他の因子、すなわち勢力のための闘争 (*la lutte pour la puissance*) が介在しなければ、不平等は、自然的欲求そのものの必然性以上に兇暴な必然性を生みだしはしないだろう。」(同上, 抑自 84 ページ, OL p.90)

「勢力の本質そのもののなかに、本来的に言って永久に存在することを妨げるところの、根本的な矛盾が存在する。支配者と呼ばれる人々は、権力を奪われまいとするならば、これらの権力を強化することを絶えず余儀なくされており、所有することが本質的に不可能であるところの支配を、いつも追求しているだけのことである。ギリシャ神話の地獄の責苦は、その追求のみごとな形象を示している。もしも、一人の人間が、他の多くの人間の団結した力よりも優越した力を所有し得たならば、事態は別だろう。しかし、そんなことは決してない。武器、黄金、機械、呪術的あるいは技術的秘訣のような権力の機関は、つねにそれを使用する人の外部に存在していて、他人によって奪取され得る。こうして、あらゆる権力は不安定である。」(同上、抑自 86 ページ、OL p.93)

「およそ権力なるものは存在せず、ただ権力への奔走 (*course au pouvoir*) だけが存在し、この奔走には終点なく、限界なく、節度もないゆえに、それが必要とする努力にも、やはり限度も節度もないからである。この奔走に身をゆだねる人々は、かれらを凌ごうと努力する競争者たちよりも、つねにいっそう努力することを余儀なくされ、奴隷の存在ばかりでなく、かれら自身の存在、および最も親愛な者らの存在をさえも犠牲にしなければならぬ。」(同上、抑自 87 ページ、OL pp.93—94)

「こうして、権力への奔走は万人を、強者をも弱者をも、隷従させる。(Ainsi la course au pouvoir asservit toute le monde, les puissants comme les faibles.)」(抑自 87 ページ、OL p.94)「……勢力というものは、支配する者にも服従するものにも同様に無慈悲にのしかかるところの、一種の宿命を蔵している。それどころか、勢力は前者を屈従させる程度に比例して、前者を仲介として、後者を粉碎するのである。」(抑自 84 ページ、OL p.90—91) 後年、ヴェイユは、「力」が人間を物と化す作用に注意を集中し、とりわけ戦争における人間の狂愚・悲惨を描くことになるが、その社会科学的分析の雛型はここに見出すことができるのである。

権力の追求は、本来、ある目的を遂行するための手段であるはずなのに、必ずと言ってよいほど容易に自己目的に転化してしまう。その宿命的過程については、ヴェイユに限らず、幾多の学者がすでに指摘しているところである。(代表的なのは、James Mill, R.Michels.) しかし、ヴェイユが初期の社会分析において、これをすでに「人類の本質的な悪 (*le mal essentiel de l'humanité*)」(抑自 88 ページ、OL p.95) と見なし、「人間の狂愚」と呼んでいたことには留意しておいてよい。「社会生活を支配するところのすべての運動の法則は、……よりよく生きることの手段を構成するにすぎない事物のために、各人が自己または他人の人命を犠牲にすることである。……権力の追求は、……すべての目的の代理をつとめるにいたる。歴史全体を通じて存在するところの無分別で血みどろなすべてのものを説明するのは、手段と目的との関係のこの転倒であり、この根本的な狂愚 (*folie fondamentale*) である。人類史は、抑圧者たると被抑圧者たるとを問わず人間を、人間自

身が作った支配の機関の単なる玩弄物たらしめ、こうして生ける人類を惰性的な物の物たるべくおとしめられるところの、隷従の歴史である。」(抑自 88—89 ページ, OL p.95)

権力の本質的作用がこのようなものであるとすれば、「この目もくらむばかりの権力への奔走に、その限界と法則をあたえるのは、人間ではなくて事物なのである」(抑自 89 ページ, OL pp.95—96) という主張も、あながち成り立たないわけではない。とまれ、彼女はその後、科学的な見地から、「権力組織と生産方法とのあいだに恒常的に生ずる作用と反作用」に関する「抽象的な図式」の作成に入る。まず、「あらゆる種類の権力を限定するところの不可避的なリスト」としては、①どの権力でも、それぞれの状況において特定の射程を持つ機関に依拠していること、②ある人間が現実に行使するところの権力は、実際にかれの統御に服従させられてあるものにしか及ばないから、権力はつねに統御能力の限界そのもの——それはきわめて狭い——につきあたること、③どんな権力の行使も、食料生産における過剰を条件としていること、を挙げる。(抑自 91—93 ページ, OL pp.98—100)

しかしながら、さらに「権力の限界を客観的に設定するところの諸条件に対して、権力がつねに及ぼすところの反作用」が分析されなくてはならぬ。(抑自 93 ページ以下, OL pp.100～)「およそ権力なるものは、その有する手段の範囲内で——この範囲は社会組織によって規定される——自分の領域のなかで生産と統御とを改善しようと、意識的に努力する」し、また「あらゆる権力はまた、やはり意識的に、その競争者たちの生産および管理の手段を破壊しようと努力する。」

だが、権力の行使による間接的結果は、このような意識的努力よりもはるかに大きな重要性をもっている。「あらゆる権力は、それが行使されるという事実そのもののゆえに、権力が依拠しているところの社会関係を、可能な限界にまで拡げる」ことから、いわば自動的に新しい資源を発達せしめる結果となる。

ところが、事態はまたしても転回する。「権力は自己が統御し得るものの彼方に拡大する。強制し得るものを超えて支配する。自己の資源以上に浪費する。こういうのが、あらゆる抑圧的制度が自己の内部に死の萌芽のように抱いているところの内的矛盾である。この矛盾は、権力の物質的基礎の必然的に限定された性格と、人間関係としての権力への奔走の必然的に無限定な性格とのあいだの対立によって構成されている。

けだし、権力は、事態の本質によって強制されている限界を超えるやいなや、自己の依拠する基礎を狭め、この限界そのものを、ますます狭いものたらしめるのである。それは自己が統御し得るものを超えて拡大することによって、寄生・浪費・混乱を生みだし、これらのものは、ひとたび出現すれば、自動的に生長する。権力が拘束し得ないことを支配しようと試みることによって、権力は、自己が予見することも規制することもできない反作用を生ぜしめる。最後に、客観的な資源が許す以上に被抑圧者たちの搾取を拡大しようとして、その資源そのものを枯渇させる。」(抑自 96—97 ページ, OL pp.103—04)

ヴェイユがこれらの卓越した分析で論証したのは、結局、人間の権力追求は無際限で留るところを知らないが、権力の行使にはおのずからある物質的限界の存すること、しかも権力がこの限界をも越えようとする性向を本質的にもつ故に、不可避的に自滅の途をたどらざるをえないということではなかったか。そして彼女は、こういう科学的分析を歴史的現実におろすことによって、権力を統御する条件を探ろうとしたのではあるまいか。

しかしながら、社会的抑圧に関する上の分析からするならば、人間がこの抑圧的社会から脱出する可能性はまず絶無に近く、ほとんど絶望的ともいえる身動きならぬ状況に陥没することは避けがたい。上のような抑圧分析の視角をとるかぎり、そして人間が権力追求の呪縛から解き放たれ、社会機構から自由自在に脱出することが不可能であるかぎり、この抑圧を絶滅する可能性はまったくないと断定してもさしつかえない。事実、ヴェイユは、とりわけマルクス主義の社会解放理論を手きびしく批判することにより、希望の途をみずからふさいでしまっているかのように見える。彼女は、結局こう言わなくてはならなかった。

「社会生活のメカニズムそのものに、あのように密接にむすびついている抑圧の諸因子が、どうして突如として消え失せるはずがあったろうか？大工業、機械、肉体労働の墮落というものがあるのに、どうして労働者が、工場における単なる歯車装置以外のものであり得たろうか？かれらが単なる歯車装置であることをつづけたとすれば、どうして彼らは同時に《支配階級》となり得たろうか？戦闘の技術、監視の技術、行政の技術というものがあるのに、どうして軍事的・警察的・行政的職能が、専門、職業、したがって《民衆から切り離された常備集団》の所有物たることをやめ得たろうか？それとも、工業の、機械の、肉体労働の技術の、行政技術の、軍事技術の変化を認めなければならないのか？しかし、このような変化は緩慢で、漸次的である。それは革命の結果ではない。」（「マルクス主義の矛盾について」、抑自 192—93 ページ、OL pp.198—99）

のみならず、彼女は、「革命」という言葉が被抑圧者に対してあたかも魔法のような幻惑作用を及ぼしていると指摘する。（「自由と社会的抑圧……」抑自 53—54 ページ、OL pp.58—59；抑自 72—73 ページ、OL p.78；「革命と進歩との観念の批判的検討」抑自 170—73 ページ、OL pp.178—80；「断片、ロンドン」（1943）抑自 209—10 ページ、OL pp.213—14）彼女が革命の可能性について悲観的なわけは、被抑圧的立場にある大衆がこつぜんとして強大な力や創造的知性に転化するという「奇跡」を信じないからである。この点に関しては、ヴェイユはマルクスよりもむしろミヘルスに近く、後期に属すると思われる論文の中ではあるが、「少数者への多数者の服従」という事実を確認する。

「大衆は問題を提起もしなければ、解決もしない。それゆえに、大衆は組織もしなければ、建設もしない。のみならず、大衆は、かれらもまた、かれらがそのなかで生き、苦しむ、悩んでいる制度の欠陥を深く身につけている。かれらの希求は、制度の刻印を帯びて

いる。資本主義社会は一切を金銭に還元する。大衆の希求もまた、主として金銭で表現される。制度は不平等に依拠している。大衆は不平等な要求を表現する。制度は強制に依拠している。大衆は、発言の権利を持つやいなや、かれら自身の陣営内で、おなじ種類の強制をおこなう。大衆のなかから、かれらを形成した、あるいはむしろ歪曲したところの制度と反対のものが、どうして自然発生的に生じ得るかは、解しがたい。」「(「革命と進歩……」, 抑自 173 ページ, OL pp.181—82)

「少数者が支配するのに、多数者が服従する、しかも苦悩と死とを押しつけられるまで服従するからには、数は力であるというのは真実ではないのである。われわれはどう信じがちであろうとも、数は弱さである。弱さは、空腹に悩み、憔悴し、哀願し、戦慄する側にあつて、らくに生活し、慈悲をあたえ、脅かす側にはない。民衆は多数であるにもかかわらず服従しているのではなくて、多数であるから服従しているのである。」(「服従と自由……」, 抑自 180 ページ, OL p.189)

「……力とは関係である——強者は弱者との関連において強いのだ。(*La force est une relation ; ceux qui sont forts le sont par rapport à de plus faibles.*) 弱者は社会的権力を獲得する可能性を持たない。実力によって社会的権力を獲得する人々は、この作業の以前においてさえも、人間大衆を服従させる集団を常に構成している。……数が力であるのは、数を左右する人の手にあつてのことであつて、数を構成する人々の手にあつてではない。(le nombre est une force aux mains de celui qui en dispose, non pas aux mains de ceux qui le constituent.) 石炭に包蔵されたエネルギーが蒸気機関を通つたあとで初めて力になるのと同様に、人間大衆に包蔵されたエネルギーも、その大衆よりもはるかに小さくて、大衆の外にあり、大衆と関係を設定した集団のために、初めて力となるのである。……大衆の力は、大衆にとって外的な利益のために利用される。そのことは卵の力が農夫の利益のために、馬の力が騎手の利益のために利用されるのと、まったく同じである。」(「マルクス主義学説は存在するか?」(1943), 抑自 248 ページ, OL pp.252—53)

では、通念としてまかり通る社会革命の実質は、ヴェイユにとっては何であつたらうか。彼女はいわゆる「革命」の本質を、直截に、異つた権力間の交替と規定する。

「あたらしい社会形態が古い社会形態に対して勝利するためには、あらかじめこの持続的な発達新しい社会形態をして、社会組織体のはたらきのなかで、より重要な役割を実際に演じさせること、換言すれば、公的権力が有する力よりも優越せる力を生ぜしめることが必要である。こうして、制度の変革が血みどろな闘争の結果と見えるときでさえも、決してほんとうには連続性の断絶はないのである。」(「自由と社会的抑圧……」, 抑自 98 ページ, OL p.105)

「血みどろの闘争が、ある制度を以て他の制度に代えると見えるとき、その闘争は実際には、すでに半ば以上遂行された変革の祝聖 (*consécration*) であり、すでに半ば以上権力

を持った人たちを権力の座につけるのである。それは一つの必然性である。……外見上は安定した制度の下で、社会関係の構造における変革、種々の社会的カテゴリーの権限における変化が、ゆっくりとおこなわれるのである。……闘争は、すでに権力を持っている人々に権力をあたえるのだ。」（「革命と進歩……」，抑自 175 ページ，OL p.184）

「力は持主を換えても、依然として強者と弱者との関係、支配の関係である。力は無限に持主を換えても、関係の項は排除されない。政治的変革のとき、権力を握る用意のある人々は、すでに実力、すなわち弱者に対する支配を所有しているのである。」（「断片，ロンドン」，抑自 203 ページ，OL p.208）

「……目に見える革命は、すでに開始されていた目に見えない革命の裁可としてでなければ、決しておこらないからである。ある社会層が騒然と（した）権力を獲得するのは、その層がすでに暗黙のうちに、権力を、少くとも大部分握っていたからである。」（「マルクス主義学説は……」，抑自 237 ページ，OL pp.241—42）

もはやヴェイユには絶望しか残されていないかにみえる。人すべてが社会という不可抗な存在に組み敷かれ、かつ権力への奔走のメカニズムに巻き込まれることにより、これら巨大な恣意的力に翻弄されながら、しかも容赦のない必然性に支配されるとみる時、誰がこの苛酷な現実を前にして立ちすくまないでいられようか。しかしながら、彼女は、自己のもつすべての勇気をふりしぼって、絶望に陥る寸前のところで踏み留まっているようである。絶望は、彼女にとっては安易に過ぎる逃避でしかなかったのではないか。その故に、生涯を通じてありとあらゆる試練をみずから求め、想像を絶するような絶望的状况に置かれた場合でも、絶望に逃避することだけはみずから厳しく禁じていたように見受けられる。苦悩を耐え忍ぶことだけが、彼女の願いであった。

マルクス主義にままみられる幼稚な幻想を徹底的に批判した彼女にとっては、「革命」に社会的解放の希望を託することはとうていできない。では、何によって、絶望に逃避することなく、抑圧的社会からの脱出を図ろうとするのか。まずもって言うべきは、ヴェイユが上述のような社会的抑圧論を構成する限りにおいて、そこからの完全なる脱出は最初から断念せざるをえなかったことである。論文「自由と社会的抑圧との原因についての考察」の最初のところで、彼女はこう記している、「われわれは将来を奪われた時代を生きている。（*Nous vivons une époque privée d'avenir.*）来るべきものに対する期待は、もはや希望ではなくして、却って苦悩である。」（抑自 53 ページ，OL p.58）と。

こういう彼女にとって、期待しうるのは、たんに「より少い悪」（*moindre mal*）でしかない。現代の社会生活の状況の中では、この方式だけが、「最も冷静な明敏を以て適用するという条件つきで、適用し得る唯一のものとして残る。」（「服従と自由……」，抑自 184 ページ，OL p.192）「最も少く悪い社会」とは、「大多数の人間が行動しながら多くの場合に思惟する義務を持ち、集団生活全体に対して最大限に統御の可能性を有し、最も多くの独立

性を所有するような社会である。」(「自由と社会的抑圧……」, 抑自 129 ページ, OL p.136) この文章にもあるように、彼女は保守にも革新にも不評を買う「思惟」に絶大なる価値を附与し、その力によって可能な限り集団的なものを統御し、自由を獲得しようと図る。

ただし、この場合の自由とは、次のように把握さるべきものである<sup>(4)</sup>。「真の自由とは、欲望と満足との関係によってではなく、かえって思惟と行動との関係によって規定されるのである。その人のすべての行動が、かれの目ざす目的およびその目的に達するに適切な手段のつながりに関する前以ての判断から生ずるような、そういう人間は、完全に自由であろう。……生ける人間は、いかなる場合にも、絶対に曲げられない必然性によって、四方八方からとりかこまれていることを、やめることができない。しかし、人間は思惟するゆえに、必然性が外部から人間に押しつける拍車に盲目的にしたがうことと、人間がそれについて自分で作りあげる内部の表象に適合することのあいだで、選択をおこなう。そして、この点にこそ、隷従と自由との対立が存するのである。」(同上, 抑自 108—09 ページ, OL p.115) 自由に対して様々な障害の存することは十分にわきまえながら、なおかつ彼女は行動、なかんずく労働の過程に思惟を働かすことによって自由の領域を拡大して行くという望みを捨てない。その根拠は、次の点にある。

「人間がその生存の各瞬間において緊密に依存しているところのこの社会は、人間が思惟することを社会が必要とする瞬間から、こんどはいくらか人間に依存することになる。なぜと言うに、爾余のすべては、肉体の動きをも含めて、力によって外部から押しつけることができるが、世界における何物も、人間をしてその思惟能力を行使すべく強制したり、人間からかれ自身の思惟の統御をとりあげたりすることはできないからである。」(同上, 抑自 123 ページ, OL p.130)

こうして、やや意外にも思えるが、ヴェイユは楽観的ともいえる結論をくだして行くことになる。「集団への個人の従属に対してたたかうことは、まずおのれ自身の運命を歴史の流れに従属させるのを拒否することからはじめることを含んでいる。このような批判的分析の努力を決意するためには、その努力をなす人間は、社会的偶像を越えて、宇宙との精神の原協約を自分のためにとりむすぶことによって、狂愚と集団的眩暈との伝染をまぬがれることができることを理解すれば足りるのである。」(同上, 抑自 152—53 ページ, OL p.162)

ここに、集団が求める個人の集団への一体化や献身をあくまでも拒絶する、ヴェイユの生涯を貫く思想の躍動を看とることはできる。しかし、ヴェイユの社会的抑圧に関する分析にある欠陥の存することも、卒直に認めておかななくてはならない。その最たるものは、せっかく明確に区別したかにみえる社会的従属と社会的抑圧とを不分明な形で混同したまま立論を進めていることである。社会学的見地から批評すれば、集団と組織と社会とをその性質においてなんら分別することなく、一律にそれら超個人的実在への個人の隷従を帰

結しているのは、けっして妥当とは言えない。このような弱点を覆い隠すことなく、従ってまた容赦のない学問的吟味を繰り返して行方一方で、なおかつヴェイユが残したこれらの貴重な考察の数々を社会学的研究蓄積の目録の中につけ加え、これを活用して行くことが肝要なのではあるまいか。

## 〔注〕

- (1) Rees は、ヴェイユの抑圧概念を次のように明快に説明している。「自由は単にいっさいの必然の欠如ではない。自由をこのようなかたちで考えることは、それからいっさいの意味を奪うことにほかならない。『真の目的は、欲望と満足との関係によってではなく、思惟と行動との関係によって規定される。そのすべての行動が、その人間のめざす目的、およびその目的に達するための適切な手段の連鎖にかんする予備的判断から生じるような人間は完全に自由な人間とされるであろう。』だから、おのれ自身が参加しない思惟を実行する受動的な道具として人間が働く場合には、かならず抑圧が存在する。これこそマルクスが、『肉体労働と知的労働との墮落的分裂』と呼んだものにほかならない。」(リチャード・リース、前掲書、34—35 ページ)
- (2) なお、本章の最初に論述した「力」の三側面(12号、26 ページ)に照らしていえば、ヴェイユが女工生活を送り、自由と抑圧に関する論文を書き綴っていた1934年から35年にかけては、権力や社会のメカニズムの分析に主力が向けられ、戦争についての論及は比較的乏しい。編集書である『抑圧と自由』には戦争について論及した箇所が見出されはするが、これは時期的にはかなり後期のものようである。それは、マルクスとエンゲルスが、人類の歴史における戦争という因子を見落してきたことに対する批判として展開されている。「マルクス主義の矛盾について」、抑自193 ページ、OL pp.199—200 ; 「断片、ロンドン」(1943) 抑自208 ページ、OL p.213)
- (3) シュンペーターの「機能的階級論」については、筆者は批判的検討を試みたことがある。拙稿「階級変動の理論について」(東北社会学研究会『社会学研究』29号、1968年)150—51 ページ、154—55 ページ。
- (4) 本節の注(1)にも引用したが、自由の二つの観念に関するリースの評論(前掲書、第三章自由の定義)は、参照するに値する。

## 〔3〕『労働の条件』

ヴェイユが女工生活を送っている間に書き留めた日記、手記、手紙、文書などは、彼女の思想の核を形づくる記録として重視され、ヴェイユを語る人はおしなべてこの時期(1934年末～1935年7月)に注目している。後年、ペラン神父にあてた手紙——珍らしくヴェイユは自分の生涯について回想している——の中で、彼女はこう述懐している。

「……工場の生活で不幸というものに触れたことによって、わたしの青春は死んでしまっていたのです。それまでわたくしは自分の不幸以外に不幸の経験がなく、自分の不幸は自分のですから重大なものとは思われませんでしたし、またそれは生物学的なもので社会的なものではなかったので、半分の不幸にすぎなかったのです。世の中に多くの不幸があることはよく知っていて、そのことに悩みましたが、長い接触によってそれを確認したことはなかったのです。工場ではだれの目にも、わたくし自身の目にも、わたくしは無名の大

衆といっしょになっていましたから、他の人々の不幸はわたくしの肉の中に、また心の中にはいりこみました。わたくしを他の人々の不幸から切りはなすものは何もありませんでした。そこではわたくしは本当に自分の過去を忘れ、全く未来に期待を持たず、あの疲労にたえて生きのびる可能性を容易に想像できませんでした。……ローマ人が一番軽蔑する奴隷のひたいに赤く焼けた鉄でしるしをつけたように、わたくしはあそこで永遠に奴隷のしるしを受けました。それからいつもわたくしは自分を奴隷として見てまいりました。」  
 (「神を待ちのぞむ」, 著Ⅳ 32 ページ)

この時期は、初期の社会的な分析と後期の宗教的省察とを架橋する重要な接点として位置づけることができる。上の引用文からも窺えるように、工場生活の合間に書かれたこれらの手記類は、とりわけ労働者の「不幸」について透徹した考察を加えた稀有の記録として知られている<sup>(1)</sup>。が、本稿では、断片的な彼女の手記類をたどってできるだけ論理齊合的な展開を追い、彼女の社会的抑圧論の発展および労働社会学的な分析を再構成することに主眼を置いてまとめて行きたい。

この時期の考察の主題を探し求めるとすれば、それは明らかに労働者の境遇に即した「不幸」論である。しかし、この不幸論が同時に実質的に彼女特有の労働社会学的分析を成していたことに注意をうながさないではいられない<sup>(2)</sup>。筆者のみるところでは、特に工場組織と工場生活に関する点描、労働者の境遇についての考察、労働の改善に向けての献策などに、社会学的に評価すべき珠玉の考察が秘められている。

手記類の最初の方で語られているのは、企業ないし工場組織がもつ非人間的な圧迫についてである。テヴノン夫人にあてた手紙で、彼女はこう書いている。

「表現できる事柄について言えば、企業の組織についてかなり多くのことを学んだわ。それは実に非人間的よ。細分化された仕事——それも賃仕事よ——、企業の諸要素間の関係がまったく官僚的な仕組になっていること、現場での作業がいつもちがっていることなど。注意力も、ここではほかにそれ相当の対象に集中して行くことができないので、反対に、毎秒ごとにほんのつまらない問題に向かって行くよりほかに仕方がないありさまよ。……」(「アルベルチヌ・テヴノン夫人にあてた手紙三通」(1934~35), 労条 12 ページ, CO p.15)

「この隷属状態 (esclavage) には、二つの要素があるの。つまり、スピードと命令よ。スピードとはこういうことなの。〈注文を完了する〉ために、一つ一つの操作を、思考よりもっとはやく、じっくり考えることはおろか、もの思いにふける余裕もゆるさないような速度でズンズン続けてやらねばならないということよ。一たん機械の前へ立ったら、一日に八時間は、自分のたましいを殺し、思考を殺し、感情を殺し、すべてを殺さなければならぬ。怒っていようと、悲しかろうと、いやであろうと、怒りも悲しみもいやな気持も全部呑みこんで、自分の心の奥底に押しこんでしまわねばならぬ。こういうもの

は速度をおとすからよ。命令とは、こうなの。出勤のとき、名簿にチェックしたら、退社のときチェックするまで、あらゆる瞬間にどういう命令をうけるかわからないのよ。そして、いつも黙って、服従しなければならないの。命令は、実行するのがつらいこともあり、危険なこともあり、また、実行不可能なこともあるわ。二人の上役から、まるで正反対な命令を与えられることもある。でも、そんなことはどうでもよいのよ。とにかく、黙って、屈服するのよ。上役に口答えることは、——どうしても必要な場合でも——その上役が、よい人であるとしても——それはつねに激怒をまねく目にあうことよ。……自分がいらいらしたり、きげんのわるいことがあっても、ぐっと呑みこまねばならないの。言葉や行動にあらわしてはいけないの。行動は四六時中、労働のためにしばられているんだもの。こういう状況では、思考は小さくかじかんでしまうわ。……」(同上、労条 19 ページ、CO p.21)

日記には、彼女はこう記している。

「時間の測定はでたらめである。それに、仕事は賃仕事で、給料はあわれな程であり、注文伝票を未完了にするまいとして、ぎりぎりのところまで自分の全力をふりしぼってやるので、完全に疲れきってしまう。……それは、どうしてもくたくたに疲れずにはいないような仕事をしているからではないのだ。ただ、時間測定系の気まぐれと怠慢のためなのだ。主観的な結果（給料）も、客観的な結果（完成した仕事）も、払っただけの苦勞にみあうものではないのに、くたくたに疲れてしまうのだ。そこで、心のもっとも奥深くまではずかしめられた気持になり、本当に自分は奴隷なのだと思う。」(「工場日記」、労条 81 ページ、CO p.74)

ある断片では、工場組織が官僚体制的で、不熟練工になるほど企業との結びつきがいっさい断たれてしまうことを指摘し、不熟練労働者たちが自分の仕事上の位置をつかむことができない状況を、次のように描写している。

「自分にはまるでわからない何か大きい機械にのせられているような気持。自分のしている仕事が、どういう要求にこたえるものなのかもまるでわからない。明日になれば、何をしようになるかもわからない。給料が減るかもしれないことも。解雇されるかもしれないことも。」(「断片」、労条 125 ページ、CO p.110)

「自分がしている仕事が、いったい何に使われるものかをまったく知らないでいることは、非常に意気をくじけさせるものである。自分がいろいろと力をつくしているところから、一つの生産物が生れ出してくるのだという感じをいざいざすることができないからである。自分もまた、生産者の列に加わっているのだという自覚を持つことができない。それにまた、労働と報酬との間の関係についてもなにもわからない。ただ、やみくもに仕事が課せられ、でたらめに報酬が支払われるように思っている。いわば、母親が、子供たちをおとなしくさせておくために、できたらポンポンをあげるからという約束で真珠を与えそれに糸を通させる、そういう子供たちにちょっと似ているような気がする。」(同上、労条 129

～130 ページ, CO p.113)

デトウフ氏にあてた手紙では、工場の規律がヴェイユの期待した人間的規律（服従している人間の善意、精力、知性に大はばによびかけるすべての規律）を完全に裏切るものであった、と彼女は述べている。

「わたしが実行しました服従の形は次のような性格によって定義づけられます。まずそれは、時間を数秒という単位に縮小します。……わたしは絶えず、現になしつつある動作に対してだけわたしの注意を向けるよう制限しなければなりません。……第二番目に、服従が人間の全存在を拘束します。あなたの領域では、命令が活動に方向を与え、わたしにとっては、ひとつの命令が魂を根底から混乱させることがあり得ました。……三番目にこの規律は、動因として、最も下品な形——何スウという尺度——における利益と恐怖にしか頼らないのです。もしこれらの動因に、それ自体として重要な地位を与えますと人は墮落するのです。……」

不正や屈辱を軽蔑するようにさせることのできる魂の偉大さはこういう環境の中では行使不可能です。反対に、一見無意味な多くのことが——タイムレコーダーを押すこと、工場に入る時身分証明書を提示する必要（ルノーで）、支払いの実施方法、軽い処罰——深く屈辱を与えます。なぜなら、それらのことが自分たちの境遇を思い出させ、感じ易くさせるからです。我慢を強いられることや飢えについても同様です。」「(オーギュスト・デトウフ氏への手紙)(1936～37)、労条 193—94 ページ, CO pp.182—83)

また、工場長への手紙の中にも、次のような言句が見出される。

「わたしは自分の経験から二つの教訓を引き出しました。第一の教訓は、最も苦しいそして予想もしなかったことですが、圧迫というものは、ある程度以上強くなると、反抗への傾向ではなくて、完全な隷属への殆んど不可抗的傾向を惹起するということです。……第二は人類が二種類にわかれているということです。何かの価値を認められる人と何の価値も認められない人と。第二の種類に属していると、何の価値も認められないことが当然と思えるようになってしまいます。……」(「工場長への手紙」(1936)、労条 155 ページ, CO p.138)

ここまでくると、労働者の境遇に関する記述ともう見分けがつかなくなる。ヴェイユがみずから奴隷の烙印を受けたと言う労働者の境遇とは、一体どんなものであったか。労働のさ中にある時は、それを的確に表現しえぬあるもどかしさが感ぜられたかのように、ヴェイユの筆致は苦渋の表情を見せる。少し後になって回顧的に、従ってある程度客観的に考察した時にはじめて、彼女特有の鋭い表現が蘇ってくるのではあるが。

「……隷属状態にいたために、わたしは自分にも権利があるのだという感覚を、すっかり失ってしまった。人々から何も手荒な扱いをうけず、なにも辛抱しなくてよい瞬間があると、それがわたしにはまるで思恵のように思える。……」(「工場日記」、労条 103 ページ)

ジ, CO p.92)

「そのほかのあらゆる隷属の形態においては、隷属は境遇の中にある。(l'esclavage est dans les circonstances.) ただこの点においてのみ、隷属が、労働そのものの中にも移されてくる。

たましいに及ぼす隷属の影響。」(「断片」, 労条 141 ページ, CO p.124)

「労働者の生活〔の精神的諸〕条件 (les conditions morales de vie des ouvriers) を表現するためのわたしの方法を余りにも悲観的なものとあなたは判断なさっています。このような告白は大変つらいことですが、わたし自身も、わたしの尊敬の感情を保持する〔の〕に、この世の苦しみのすべてを経験したとということを繰返す以外に、何ともお答えできません。もっと卒直に申しますと、生活のこのような激しい変化の最初のショックで、わたしはその感情をほとんど失いました。そしてそれを取り返すのに苦勞しなければなりません。……わたしの人間であることの尊敬の感情を無疵に保てるような方法で、この労働〔の〕条件に耐えるすべを覚えるまではこの条件から逃れ出まいと誓いました。わたしは決心を実行しました。しかしわたしは最後の日まで、この感情は絶えず取り戻さなければならないものだということを知りました。なぜなら、生存条件はそれを抹消し、わたしを家畜の地位に落とそうとしているからです。」(「工場長への手紙」, 労条 150 ページ, CO pp.132—33)

このあたりから、彼女の考察はとみに鋭さを増してくる。

「貧乏で依存している時に、もし強い魂と、勇気と、苦痛と剝奪への無関心を持っていれば、資本を持っているようなものだというのはほんとうです。それはストアの奴隷の資本でした。しかしこの資本は近代産業の奴隷達には禁止されています。運動の機械的連続と、調子の速さを考慮しますと、恐怖と金銭という餌以外の刺激を持ち得ないような労働によってかれらは生活しています。(ils vivent d'un travail pour lequel, étant donné la succession machinale des mouvements et la rapidité de la cadence, il ne peut y avoir d'autre stimulant que la peur et l'appât des sous.) ストイシズムの力によってこの二つの感情を抹殺することは、要求された調子で働く状態の外に立つことになります。ですから、できるだけ苦痛を少なくする最も簡単な方法は、自分の魂のすべてをこの二つの感情の水準まで下げることです。しかしそれは品位を失墜することです。もし自分自身の目に対して品位を保持しようと望むならば、毎日の自分自身との闘い、永遠の断腸の思い、永遠の屈辱感、烈しい倫理的苦痛を余儀なくされることになります。なぜなら、産業生産の要求を満たすために絶えず身を落とし、自分の固有の価値を失わないために立ち直らなければならないという具合ですから。社会的圧力〔抑圧〕の近代的形式の中に存在するおそろしさは、これなのです。そしてひとりの上長者の善意や粗暴さはたいした変化をもたらす得ないのです。わたしがいま申し上げましたことは、誰であろうとこのような境

遇にあるすべての人間に適用され得るものだ、ということをはっきりお判りになったと思います。」(同上、労条 158—59 ページ、CO pp.141—42)

「わたしの気にさわるのは、隷属そのものではなくて、倫理的に耐えがたい結果を含むある種の隷属の形式なのです。(Voyez-vous, ce n'est pas la subordination en elle-même qui me choque, mais certaines formes de subordination comportant des conséquences moralement intolérables.) 例えば、隷属が服従の必然性だけでなく、気に入るようにとの絶え間のない配慮を含む場合に、それはわたしにとって耐えがたいものと思われまふ。——他方また、わたしは知性か、[考案か]、意志か、職業意識が上役の命令なしでは介入し得ず、実行するためには精神も心も作用し得ない消極的屈従だけが要求されるような形の隷属を受け入れることができません。そこで、支配されている人達は、殆んど他人の知性によって操作される物体の役割を演じています。これがわたしの労働者としての境遇です。」(同上、労条 167 ページ、CO p.151)

「労働者は賃金の不足だけに苦しんでいるのではない。現在の社会によって下層の地位に追い込まれ一種の奴隷に落とされているから苦しむのである。(Il souffre parce qu'il est relégué par la société actuelle à un rang inférieur, parce qu'il est réduit à une espèce de servitude.) 賃金の少ないことはこの劣等性と奴隷性との結果のひとつに過ぎない。労働階級は、かれらの工場の外で生活水準を、工場の中で労働条件を強制的に与えている社会の指導者層の恣意的意志に隷属していることを苦悩している。(La classe ouvrière souffre d'être soumise à la volonté arbitraire des cadres dirigeants de la société, qui lui imposent, hors de l'usine, son niveau d'existence, et, dans l'usine, ses conditions de travail.) 雇主の恣意によって工場内で受けている苦悩は、賃金の安いために工場外で受けている辛抱と同じ位に強く労働者の生活を圧迫している。」「(「合理化」(1937), 労条 220 ページ、CO p.217)

ずっと後(マルセイユ滞在の時期)になると、工場生活に関する考察はいっそう体系性を増すが、そればかりでなく、労働者の境遇の本質についても魂との関連において存在論的な考察が深められてくる。一言でもってつくせば、主体的な思惟の能力を剝奪されている事実——それは人間としてではなく、いわば物としての存在でしかない——に、彼女は労働者の隷属の根源をみたのであった。やや長文にわたるが、その箇所を提示しておこう。

「協力、理解、仕事の中の相互評価は上位階級の独占である。労働者の水準ではいろいろの職やいろいろの機能の間につくられる関係は、物質相互間の関係であって人間の間の関係ではない。部品は札や名称、形式材料等の指示等と一緒に回って来る。人間であるのはその部品であって、交換可能な部品であるのが労働者であると考えてもいい位である。……

物が人間の役を演じ人間が物の役を演ずる。それが悪の根源である。……この人達は人

間が物に転化し得る限度一杯まで物になり切っている。しかし意識を失うことは許されていない物質であって、いつでも、突発事件に直面し得る用意がなければならない。……すべて人間の活動には、それを達成するに必要なエネルギーを供給する動因が必要である。そしてその活動は動因が高級であるか低級であるかによってよくも悪くもなる。……労働の条件そのものによって、叱責と解雇への恐怖、金銭を貯えようというがつつした欲望、そしてある程度には速度記録への趣味以外の動因が入って来ることが妨げられる。……

これらの動因が魂を占領していると同時に、思考は苦悩を避けるために一つの時点にしがみつき、意識は労働の必要性が許す限り消失している。……

……きわめてまれないくつかの例外を除けば、労働者は工場の中で、何物も思考によって所有することはできない。機械は彼のものではない。彼は命令を受けて、どの機械かに奉仕する。彼が奉仕するのであって、彼がそれを使用するのではない。機械は労働者にとって、金属の塊にある形を与えるための単なる道具ではない。労働者の方が機械にとって、ある作業のための部品を持って来る道具であり、労働者はある部品とその前に来た部品、あるいはその次に来るであろう部品との関係を知らない。

製品には製品の歴史がある。それは製品のある段階から次の段階へと移る。労働者はこの歴史の中で無価値である。彼はそこに足跡を残さず、またそれについて何も知らない。……労働者は彼の生産している物を知らない。従って自分が生産したという感情を持たず、ただむなしく自分を消耗したという感じを持っている。……工場が有益な物を創造するのであって、彼が創造するのではない。……その賃金は努力の価格というよりも施し物のように思われる。労働者は生産にとって、不可欠であるがそこで何の価値も認められない。それゆえに、無益に強制される肉体的苦痛、敬意の不足、残酷さ、たとえ軽いにしろ侮辱、などのひとつひとつが、自分が物の数に入らず、安住してもいないことを思い出させているように思われる。……工場はかれらを、かれら自身の国の中で、外国人、追放者、根こそぎにされた人間にしてしまう。……労働者たちが工場の中で罷業の時には自分の家にいるように感じ、働いている時には外国人のように感ずる場合に、社会生活はその中央まで墮落しなければならない。反対も本当に違いなだろう。労働者たちは、かれらが工場で働いている時にも自分の家にいるように安住を感ずるであろう時にしか、かれらの国の中でほんとうに安住できないであろう。」（「工場生活の経験」(1941—42)、労条 243—46 ページ、CO pp.247—51)

「手労働そして一般に実施的労働、つまり狭い意味での労働の中に、完べきな社会的公平をもってしても消せないであろう隷属の不滅の要素がある。それは彼が、究極性によってではなく、必要性によって支配されているという事実である。善なるもののためではなく必要のために働いている。そこに存在している人たちが言うように《暮しを立てるために必要だから》働いているのだ。努力してもその結果として、現在持っているも

の以上何物も持たないであろう努力を尽くしている。」(「奴隷的でない労働の第一条件」, 労条 253 ページ, CO p.261)

マルクスの疎外労働論をもしのぐ、工場労働の本質をえぐったこのような論述に触れると、アカデミックなあらゆる産業社会学的分析が急速に色あせてみえるのもやむをえないことかもしれない。ヴェイユがいわゆる「不幸論」や「根こぎ論」を展開するのは、こうした工場生活の体験に即した幾度にもわたる考察を経てからのことなのである。とはいえ、卓越した分析能力をもつヴェイユをもってしても、「不幸」を完全な形で把えることはこの上ない難事であったようである。以下の文章を読むと、不幸をとらえること自体がある苦悩を伴うのではないか、という印象すら受けずにはいられない。

「工場労働者の不幸はさらに神秘的である。労働者自身がこの問題について書き、語り、あるいは反省することさえ困難である。なぜなら、不幸の第一結果は思考が逃亡を欲しているということであるから。思考は傷つける不幸を眺めることを欲しない。」(「工場生活経験」, 労条 238 ページ, CO p.241)

「印象しか描写しない時に信じて貰うのは困難である。しかし人間〔の〕条件の不幸はそういう方法でしか描写できない。不幸は印象だけでできている。生活の物質的境遇は、そこで生活することが厳密に可能である限りは、それだけでは不幸を物語らない。なぜなら同じような境遇が、他の感情と結びつければ、幸福にするであろうから、幸福にしあるいは不幸にするのは、生活の境遇に結びついた感情である。しかしその感情は恣意的ではない。暗示によって押しつけられあるいは消されるものではない。境遇自体の根本的改変によってしか変えられない。それを変えるためにはまずそれを知らなければならない。不幸位知りにくいものは無い。それはつねに神秘である。それはギリシャのことわざのように啞である。そのほんとうのニュアンスや原因を把握するためにはとくに内部的分析に馴れていなければならない。そして不幸な人間の場合は一般的にそうではない。たとえその準備ができている場合でも、不幸それ自体がこの思考の活動を妨げる。そして屈辱の結果として、思考の立入りを許さない、沈黙と虚偽に覆われた禁止地帯ができる。不幸の人達が苦情を言う時、かれは殆んどつねにほんとうの不幸を明らかにせず偽の訴えをする。それに、深い恒久的不幸の場合には、非常に強い羞恥心が苦情を止めさせる。こうして人間の中の不幸な条件のひとつひとつが沈黙地帯をつくり、人間は島の中のようにそこに閉じ込められる。」(同上, 労条 246—47 ページ, CO pp.251—52)

意味深いこの引用文に続く箇所では、彼女は労働者の不幸を証言する方法について言及している。「自発的にある一定期間、しかしその不幸がしみ込むのに十分な位長い間、不幸の中に服し」た者には、「残念ながら他人に知らせるのは困難であるが、确实だという感情ができあがる」と。

しかしながら、ヴェイユの証言といえども、外側からこの沈黙の島に侵入してきたとい

う限界を完全に拭い去ることはできない。私はこれを必ずしも否定的な意味で言っているのではない。労働者の家族に生まれついたのではない以上、誰もが本質的にもたざるをえないこの限界がなければ、労働者の置かれた境遇を「不幸」とみることはなかったであろうと指摘しているにすぎない。知識人の世界から労働者の境遇に一時的にせよ移り住んだ者だけが、良否いずれの意味でも、後者の「不幸」を語りうるのだと言いえよう。他の別世界の住人でなければ、労働者の陥っている状況を苦しみとは認知しない。当の労働の世界に生息する者は、余人には「苦しみ」とみえることを苦しみとは思わず、それ自体で完結したこの世界にある諦念を抱いて安住しているのが常であるからである。とはいえ、労働の世界に身を挺するという熾烈な体験をくぐり抜けた人間でなければ伝ええないある強い説得力を彼女の証言がもっていることは否定すべくもない事実である。

いずれにせよ、人間本来の条件である思惟、尊厳、主体性を喪失させられている状況に労働者の隷属の烙印を見たヴェイユが、まさにこの状態に労働者を縛りつける技術の極地であるところのテラー・システムの存在を無関心のまま放置しておくわけはなかった。講演筆記であるせいもあるが、彼女は口を極めて烈しくテラー主義を攻撃している。それが労働者たちに及ぼす底知れぬ倫理的な低落が、人間の尊厳を何よりも重んずる彼女には堪えがたく思われたにちがいない。

「労働者に対する倫理的効果の観点からいえば、テラー主義は疑いもなく労働者の低下を惹起した。……

労働階級の分割はしたがってこのシステムの基礎である。労働者間の競争の発展はそのために必要欠くべからざるものである。最も低級な感情への呼びかけも同様である。賃金は唯一の動因である。賃金〔で〕十分でない時は、残酷な解雇〔がそれ〕である。……

このシステムは労働の単調さを造り出した。……このようなシステムによって、単調さが労働者たちにとって我慢できるものになるというのが真実とすれば、そこがこのシステムについて言い得る一番悪い点である。なぜなら、労働の単調さは最初は必ず苦痛なものであることは確かだからである。もしそれに慣れることができるとすれば、それも倫理的墮落という代償を払った上でのことである。……

工場内での規律、強制はこのシステムのもうひとつの特徴である。それは本質的な性格でさえある。また、このシステムの考案された目的でもある。なぜならテラーは専ら労働者の抵抗を破壊するための研究をしたのだからである。〔動作〕を何秒で、そして他のある〔動作〕を何分で無理にさせられることによって労働者には抵抗力は何も残っていない。……

……雇主は工場、機械を所有し、製造工程および彼の工場の金融上商業上の知識を独占しているだけでなく、労働および労働時間の独占を主張する。労働者に何が残されているのか。電力と同じように動作をする可能性のあるエネルギーが残っている。そのエネルギー

は電力と全く同じように利用される。

最も粗野な方法によって、強制と利得熱を同時に刺激剤として用いて、つまり人間的なものには何も訴えずに、鞭と砂糖を結びつけて犬を仕込むのと同じように、労働者が仕込まれる。……」（「合理化」（1937）、労条 228—30 ページ、CO pp.229—31）

このほかにも、労働生活における無思考への誘惑、空腹、恐怖、強制、孤独、空虚に耐えるための代償（野心、快樂）などについて記された手記があるが、これ以上の引用を続けることはもはや蛇足というほかはあるまい。

さて、人間的尊厳の一切を奪われた労働者の境遇を抜本的に変革する方向は、それではどこに求められるであろうか。ヴェイユが何よりも労働者の人間的尊厳の奪還、精神的健康の回復を願っていたことは明白である。現在の工場労働の条件の中で奪われている一切の人間的なるものを取り戻す実際的な方策を考えることが、彼女の課題でなければならなかった。だが、1936年当時には、企業の物質的利益との妥協をも辞さぬ、労使協調的ともみえるきわめて現実的具体的な、そして何よりも社会改革的な次元でのプランの提唱であったものが、晩年に近づくと、徐々に重心が移って宗教的な瞑想に凝結して行ったことは、否定しえぬところである。

未だ労働に従事していた頃か、あるいはその直後の頃には、たとえば次のような改善の方向が提示されていた。

「貧困、隷属、依存による毎日の打撃によって必然的に押しつけられる劣等感ほど思考を麻痺させるものはありません。かれらのためになすべき最初のことは、かれらの尊厳の感情を再発見し、場合によっては維持するように助けてやることです。」（「工場長への手紙」（1936）、労条 143 ページ、CO p.126）

「数か月、数年の間、常に屈服し、すべてを耐え忍びすべてを黙って胸におさめて過ごした後で、とうとう立上ったということが問題なのだ。立ち上がる。今度は自分で発言する番だ。数日間、自分を人間と感ずる。要求と独立してこの罷業自体ひとつの喜びである。純粹の喜び、申し分のない喜び。」（「金属工業女子労働者の生活と罷業（工場占拠）」（1936）、労条 183 ページ、CO p.169）

「こういう境遇の中で理想的と思われるのはこれです。

上長者達が、かれらが労働力として利用している人間達の運命が何であるか正確に理解しなければなりません。そしてかれらの支配的先入主が、常に収益を最大にしようとするのではなくて、工場の存立に不可欠な収益と両立し得る限りにおいて、最も人間的な労働条件を組織する（organiser les conditions de travail les plus humaine）ことである必要があります。

他方労働者達は、工場の生命が従わされている必然を知りそして理解することが必要でありましょう。そうすれば、かれらは上長者達の善意を検討し評価することができるに違

いありません。かれらは自分達が勝手な命令に服従しているという感じを失うでしょう。また不可避的な苦悩はずっと耐えやすくなるであります。」「(「Rの労働者達へのよびかけ」, 労条 149 ページ, CO pp.131—32)

「力関係の中のものより大きな平等の方向に向かって、現制度を可能な限り根本的に改変することをわたしは心から希望します。今日革命とよばれているものによってそれが達成できるとは思いません。いわゆる労働革命の後でも、その前と同じように、Rの労働者達は消極的に服従し続けることでしよう、生産が消極的服従に基いて行われる限りは。……

工場に関しては、わたしが提起している問題は政治制度とは全く無関係です。それは全面的隷属から隷属と協力とのある程度の混合に漸進的に移行することで、理想は純粋な協力なのです。(un passage progressif de la subordination totale à un certain mélange de subordination et de collaboration, l'idéal étant la coopération pure.)

……あまりにもひどい窮乏の鎖の中に生きている時に、一時的に反抗するとしても、すぐに屈服するということをわたしはあまりにもよく知っています。不可避的な肉体的倫理的苦痛を、それが不可避である度合に応じて受け入れることは自分の尊厳を保つ唯一の方法です。しかし受け入れることと隷属とは異った二つの事です。」「(「工場長への手紙」, 労条 160—61 ページ, CO pp.143—45)

後になると(1941~42年)、体験した工場生活を反芻する中で、労働者の境遇に関する分析がますます冴えるに従い、労働改善策の方もいっそう労働の真ずいに肉迫して行く。しかし他方では、あまりにもその本質の形相にとらわれてしまう結果、宗教的昇華の途を一気に登りつめて行ってしまったように見受けられる。社会的次元からではなく、超自然的な観点から労働の本質を把握するあまり、時としてなされ続ける具体的提案も現実性を欠き、本質論と互いにかみ合わなくなってしまう。

含蓄深い分析を内包している論文「工場生活の経験」(1941—42)の中では、労働改善の内容は以前よりいっそう研ぎ澄まされ、より具体的になっている。一例を挙げれば、こうである。

「工場は喜びの場所、たとえ肉体と魂が苦しむのは不可避であるとしても、魂は同時に喜びを味わい、喜びをそだてることのできる場所であるべきであろう。……労働の刺激の本質を変えなければならない。嫌悪の原因も減少あるいは排除し、各労働者と工場全体の機能との関係、労働者と機械との関係、労働の中で時間の流れる方法などを改変しなければならない。……すべての労働の中で、最も強力な刺激の一つは、何かしなければならぬ、そして何か努力が達成されなければならないという感情である。」「(労条 248 ページ, CO pp.253—54)

「未来の労働の表現の中に、労働者の表現を開くこと、それは場合によって違った形で提示される。一般的に、この問題の解決は、工場全体の機能に関して各労働者に与えられ

る知識のほかに、会社に対する各作業、そして作業場に対する各労働者のある種の自制を含む工場の組織を予想する。近い将来に関して、各労働者はできる限り、次の一、二週間になすべきことをほぼ知っていて、さらにさきざきな仕事の継続の序列に関するある選択権を持たねばならないだろう。遠い将来に関しては、たしかに雇主や支配人ほど広範囲でも明確でもないが、しかしそれでもある点では同一の方法で将来に関するいくらかの目じるしを考えることができるべきであろう。この方法で、彼の実効的権利が少しも増大することなく、人間の心が渴望している所有の感情を持ち得るであろう。それは苦痛を軽減しないが嫌悪を抹消する。」(労条 251—52 ページ, CO pp.257—58)

ところが、同じ頃にかかれた次の文章は、ヴェイユが超越的な観点から、労働者をその不幸の故に最も神に結びつけられ易い存在と規定するに至っていることを示している。

「労働者たちの条件は、人間の存在そのものを構成している究極性への渴望が、神によるのでなければ満たされない条件である。

そこにかれらの特権がある。かれらだけがそれを所有している。」(「奴隷的でない労働の第一条件」, 労条 257 ページ, CO p.265)

「余暇を持っている者は、直覚的な注意に到達するために、かれらの能力の限界までその論弁的〔演繹的〕知性の才能を行使する必要がある。さもないと余暇は障害となる。……しかし、毎日の長い労働の疲労によってほとんど完全に才能が麻痺してしまっている人たちにとって障害は弱く実行はわずかなものに圧縮し得る。かれらにとってこの麻痺をつくり出す労働自体が詩に転換されさえすれば、それが直覚的な注意に導く道である。」(同上, 労条 261 ページ, CO p.270)

そうして、「かれらから苦痛を無くしようと望むだけでは十分でない。かれらの喜びを望まなければならない。金で買える快楽ではなくて、貧困の精神を傷つけない無〔償〕の喜びである。」(同上, 労条 263 ページ, CO p.273) という観点から、青年時代における無料の労働旅行が提唱されるが、これはもはや実現可能なプランではなく、ヴェイユの描いた至福の世界、切なる祈念にも似ているといえよう。

〔注〕

- (1) ヴェイユの不幸論については、当然、大木健『シモース・ヴェイユの不幸論』(1969, 勁草書房)がまず最初に参照すべきである。
- (2) 労働社会学的研究のひとつのアプローチとしてヴェイユの手記を評価する見解は、筆者がすでに提示しておいたところである。拙著『現代の職業と労働』(1972, 誠信書房) 98—103 ページ 参照。

本篇で使用した略記号は、次の著作を示している。

抑自＝シモース・ヴェーユ (石川湧訳)『抑圧と自由』(1965, 東京創元新社)

OL＝Oppression et liberté. (Collection Espoir, Gallimard, 1955)

著Ⅳ＝春秋社版『シモース・ヴェーユ著作集・第Ⅳ巻』(1967)

労条=シモース・ヴェイユ（黒木義典・田辺保訳）『労働と人生についての省察』（1967，勁草書房）

CO=La condition ouvrière. (Collection Espoir, Gallimard, 1951)

なお、引用文の中の〔 〕記号は、引用者が適当と考えた訳語ないし補足の部分である。そのほかは、漢字のひらがな化を除いて、訳者による訳をできるだけ尊重した。